



思いあたること

メチャクチャな話である。話にならない話である。弱く拗ねた大馬鹿者のために、家族を愛し、家族から愛され、夢をもち、真面目に、精一杯生活していた掛け替えのない命が、ある日一瞬のうちに奪い去られてしまう、何とも痛ましい、やりきれない、途方もない事件である。遺された家族は、その悲しさを、その悔しさを、その空しさをどうやってこの先うめることが出来るというのだろうか。

東京藝術大学の音楽環境創造科4年の武藤舞さんは、聡明な女子学生で、将来小ホールでのコンサートや音楽イベントなどをプロデュースする夢をもっていたそうだ。路上で事件の発生を目撃し、周囲の人々の安全を確保しようと110番通報をしているところを刺されたという。中央大学4年の斉木愛さんは、西洋の中世史を学び、明るく、積極的で、几帳面、目下卒業論文と取り組む女子学生であったそうだ。中学時代の文集には、こんな言葉を綴っていたという。「人生は長い。私はこの先とてつもなく長い道のりを歩んでいかねばならない」。「多くの困難にも遭遇するであろう。その時に、自分の経験を糧に乗り越えていく、私はそんな生き方をしたいと思うのだ」。

秋葉原と八王子でこの二人を含む八人が殺された。

この事件の衝撃は計り知れず、また同時にその動機の衝撃にも言葉を失う。社会の片隅にさえもおきたくない先の秋葉原の犯人も、今また甘えの毒に感染した八王子の犯人も、ほぼ同じようなことを口走っているそうだ。「自分は負け組、仕事があまくいかず、むしゃくしゃした。誰も自分に何もしてくれない。誰でもいいから腹いせに殺したかった」。自己の全ての欲求を他者に向け、カミュの『異邦人』の主人公のムルソーではないが、「太陽がまぶしかったから」といった程度の、理由にならない理由で人を殺してまでもそれを押し通そうとする恐ろしいばかりの身勝手さ、常に誰かが自分に何かを与えてくれる、また与えてくれないとすればならぬ、そう錯覚している。恐らく、彼ら自身でさえ、本当のところは判らないのだろうし、仮に犯罪心理学者や検察官・裁判官が説明をつけて見せてくれたとしても、結局は闇の底に隠れているのだろう。しかし、同時に、内を省みることなく、何事であれいつも外に非難の矛先を向ける現代の日本人の心理をとことん先鋭化したもののようにも思えてくる。

一見順風満帆に映る人の人生にも悲しみがあふれ、どんな人の人生にも何ほどか空しさが漂い、それにも拘わらず歯をくいしばりながら生きていることを、この人たちは思い浮かべたことはないのだろうか。

このような法外な事件が起こると、マスメディアは、決まって次のような議論を展開する。「非難するだけでは、事件を防ぐことはできない。事件を誘発するような問題点や社会的

ひずみ、矛盾などをできるところから減らしていくしかあるまい」。「人間関係が希薄になっている世の中で、孤立感を深める人が増えているということだ」。確かに、それは、一面の真理を語っているのであろう。しかし、この種の言説こそ、むしろ弱い拗ね者の犯罪心理を醸成し、これを助長しているところはないのだろうか、他面においてそう思ったりもする。いや、どれが間違った見方だ、どれが正しい見方だという単純な構図で片付かないところに、この問題を語る難しさがある。はっきりしていることは、皆それぞれに自分の立場で考え込まなければならないということだ。

ただ、率直に言えば、私は、「ここまでできたか、戦後教育」という思いを深くする。戦後日本の教育は、何か大変な思い違いをしたまま出発してしまっているのではないのか。教育に携わる者が言いたがらないことを敢えて言っておこう。

光に満ちた無垢な赤子の顔を見ていれば、そんなことは信じたくはないが、しかし人間は、必ずしも善なる性質ばかりをもつとはいえない、底知れない闇の情念も抱えもつ。もう忘れてしまったのだろうか、4歳の子を殺めた12歳の少年がいたではないか。頑是無い少年の心の中にも闇が潜んでいる、人間とは、そうした厄介な存在なのである。悪は、何らかの理由で人間性につけ加わった後天的要素とはいえない、誰の中にも初めから潜んでいる可能性なのである。だから、生太先生がおっしゃたように、人間は、勇・知・仁に連なる価値に触れ、自分を克服しつつ成長へと差し向けようとするわけではないか。

また、人間は、生まれながら自由でも平等でもありはしない、拘束と差異の中に生まれてくるのが現実ではないか。人間は、庇護を受けなければ歩くことさえままならず、生まれる時代も自分で選び取ったわけではない。能力にしたって、生来絵や音楽に長けた人、多言語や数理の才のある人。私は、逆立ちしても、ベラスケスやモーツァルトになれはしない、それでも私も同じ男一匹、私に出来ることをすればそれでいいではないかと自分に言い聞かせている。だからこそ、私たちは、お互いに尊重しあい、支えあい、助けあい、自由と平等を「権利問題 (quid juris)」として実現しようと努力しあっているのである。

ところが、この自由と平等が「事実問題 (quid facti)」として私たち一人ひとりの間に既実現している事柄と錯覚して、少しでも拘束や差異と感ずる状態を見出すと、たちまち不自由だ、不愉快だ、不平等だ、不条理だと騒ぎ立てる、この倒錯した精神を押し出すことを善きこととして歩んできたのが、わが日本の戦後教育史であったのではないのだろうか。教育者が楽天的な性善説を、また平板な自由・平等観をお題目のように口にしている許される時代はもう過ぎた。いや、こうした安易な言説を口にしながら続けた結果、戦後日本の教育は、既に純粹戦後二世代を経過して、こうした悲劇的人間を生み出し始めているのである。

[>前のページへ戻る](#)